

# アスペルガー障害児の コミュニケーション障害の検討

—広汎性発達障害の中核症状として—

## A Study of Communicated Handicaps for Asperger's Disorder:

Examining Core Symptoms of Pervasive Developmental Disorder

青山学院大学文学部教育学科

古荘純一

Junichi FURUSHO

### 要約

アスペルガー障害は、明らかな言語発達の遅れはないが、しばしばコミュニケーション障害を認める。今回は、アスペルガー障害におけるコミュニケーションの障害を、広汎性発達障害の中核症状である、基本的対人性および強迫の観点をふまえて、①独特の発声方法、②会話の相互性の欠如、③非言語的なコミュニケーションの障害、特に青年期の意向－推測的コミュニケーションの障害について、④表現の難解さ、正確・確実さ、整合性、細部へのこだわり、⑤字義通り性、の5つに分けて、年代別に検討した。

アスペルガー障害は、声のトーンなど幼児期にも軽度のコミュニケーションの問題があるが、学童期以降対人交流が盛んになると、コミュニケーションの特異性が明らかになる。これは、言語をコミュニケーションの有効な方法として使用することの障害であり、言語を文法が支配する表象システムとして規則通りにしか用いることが出来ないためと推測される。これに基本的な対人性障害で聞き手の意図がよめないこと、強迫・こだわりの観点から、過度の規則遵守、字義通り性、正確・確実さ、整合性にこだわるのが、彼らのコミュニケーションをより特異的なものにしていてと考えられた。

知的に高いと言われるアスペルガー障害を持つ人は、学校の現場では大きなコミュニケーションの問題がなく適応も比較的良好である。これは、自己意識の感覚によって他人とは違っているという意識を持っており、積極的に心の理論の獲得に務めているためであろう。しかし、青年期以降社会に参入すると、意向－推察的コミュニケーションの問題が顕在化す

ると推測され、理解と適切な支援を要するであろう。

## はじめに

アスペルガー障害は、1944年にオーストリアの小児科医ハンス・アスペルガーが「自閉症性精神病」として3人の症例を論文のかたちで報告したが、世界的に注目されるようになったのは80年代である。そのきっかけは、81年に英国のロナー・ウィングが自閉症の大規模な疫学調査を行った際、それまでの自閉症の基準を完全には満たさないが、部分的に満たす子どもが数倍存在することに気づき、その数倍の子ども達の特徴が、アスペルガーの記載に一致することに気づいたことである。

我が国でも90年代には精神医学の分野で認識されるようになり、最近は教育の現場でも認識が高まった。文部科学省の調査(2002年)では、通常学級に在籍し、知的障害がなく、著しいこだわりや対人関係の障害を持つ小中学生の割合は0.8%と報告された。2007年から特別支援教育が開始されることもあり、通常学級に在籍するアスペルガー障害児をどのように支援するかについて、さかんに議論がなされている。

アスペルガー障害の中核症状は、DSM-IV TR (Diagnosis and Statistical Manual 4th Version Text Revision、アメリカ精神医学会診断統計マニュアル第四版改訂版)によれば、基本的な対人性の障害と強迫的で限局的な精神活動と行動様式であり、言語発達には明らかな問題がないこととされている。しかし、実際にアスペルガー障害の人たちに接すると、表面上の言語には問題を感じないものの、通常はコミュニケーションに少なからず問題を抱えている。にもかかわらず、言語発達に大きな問題のないアスペルガー障害の人たちのコミュニケーションについての詳細な検討はあまり多くない。

なお、しばしば自閉症高機能群とアスペルガー障害の相違が議論され、臨床の現場ではお互いを区別することは容易ではないが、今回はあくまで表面上の言語発達に大きな問題を抱えていない(高機能自閉症の場合は3歳までに言語の問題が指摘されその後の言語発達が比較的良好であるものとする)一群を研究対象としたことからアスペルガー障害について述べていく。

今回筆者は、アスペルガー障害児(者)におけるコミュニケーションの問題を、中核症状に基づく観点、および年齢発達の観点から、自身の臨床経験を基にして検討し報告する。

## 先行研究

ウィングは自閉症スペクトラム(アスペルガー障害を含む自閉症と類縁の障害をもつ人々)のコミュニケーションの障害を4つに分類している。

表1：自閉症スペクトラムのコミュニケーションの障害（ウイングの分類）

口調と声量調節の障害：奇妙な声を出す。聞き手の人数で発声音量を調節しない。  
 非言語的なコミュニケーションの障害：身振り手振り、ジェスチャーをしない。  
 話し言葉を使う際の障害：会話が一方通行、細部にこだわり全体を把握しない。  
 話し言葉を理解する際の障害：字義通りに取る、比喩や嫌みの表現に気づかない。

スペルベルとウィルソンは、認知とコミュニケーションについての「関わり合い理論」について報告し、人間のコミュニケーションにおける意図の了解が果たす役割を明らかにしている。彼らは、①言語とコミュニケーションはまったく論理的に異なる別のものである、②言語とは文法が支配する表象システムであり、統語的關係、意味的關係の双方で規定されたものである、③コミュニケーションは、身振り手振りをを用いるなどすれば必ずしも言語を使わなくても済むが、内的言語を持たなければならず、特に相手の意向を推察しコミュニケーションする場合には、相手の意図を表象でき、複合的な推測プロセスを働かせるだけの能力を必要とする、と述べている。さらにスペルベルとウィルソンは、コミュニケーションにおける2つの回路を考察している。1つはメッセージの記号化と解読のシステムである。これは音声の流れを、文章として言語的意味に基底部で変換することであるが、通常のコミュニケーションはそれだけでは終わらない。反語や隠喩、その他の修辭的な表現を理解するには、もう一つの回路、ある情報を伝えようとする意図を相手が察するよう意図して手がかりを与えること、すなわち聞き手の推察によるコミュニケーションが必要である。これは聞き手に情報を伝えようとする情報意図と、意向呈示的コミュニケーション（Ostensive communication；その行動自体に何かを呈示する意図を持った行動で、聞き手に情報を伝えようとする自分の意図を伝えようとする伝達の意図）のことである。意向－推測的コミュニケーション（Ostensive-inferential communication；話者が相手に推察の基礎情報を呈示するという意図を持ったコミュニケーション）を行うにはこの両方を認識できる能力を持つことが必要である。

ハッペは、その研究方法からアスペルガー障害者は論理的な推察能力は高いが、意向－推測的コミュニケーションを持つかどうか分からないと推測している。すなわち「今日はいい天気だ」と誰かがいった場合、最初に引き出すメッセージは「今日はいい天気だ」という事実ではなく、「今日はいい天気と話者が言っている」ということである。これが事実と異なる場合、話者はなぜそう言ったのか、皮肉を込めて言っているのかなどを推測する必要がある。言語としての解釈は1つであっても、発言の根底にある伝達意図の違いから、異なる話者の意図が推測される。そして、アスペルガー障害者はこの推察能力でつまづくと述べている。しかし、知的に高いアスペルガー障害者は、次のような規則で学習していると考えられている。

表面上誤った不可解な発言+笑い=冗談

表面上誤った不可解な発言+渋面=皮肉

ただし柔軟にこれらの学習結果を応用することは困難である。通常発達の人々は柔軟かつ当たり前のように意向呈示的コミュニケーションを行っているが、彼らにとっては難題であり、それに直面すると意図に変わる硬直した規則に基づく解釈、字義通りにしてしまう。表面上あやまった不可解な発言の真の解釈は、学習によってのみ行われるため、はじめて直面する状況では把握できず、また自らが、そのような方法でコミュニケーションすることも困難である。

ところで、これまで述べてきたアスペルガー障害のコミュニケーションの問題は、主として英語圏の諸国の検討である。日本語の特徴として、話し言葉と書き言葉（平仮名）が一致するという利点はあるが、敬語などの多くの法則があり、また抽象的な表現が多い、さらに身振り手振りやジェスチャーなど非言語的コミュニケーションは、英語圏の諸国ほどは用いられないなどがあげられる。このため、日本語を母国語とするアスペルガー障害児にこのままウイングの分類を当てはめて年代別に考察するには若干の問題点があると考えた。そこで今回ウイングの分類を再編成して検討してみた。

#### アスペルガー障害児のコミュニケーション障害の分類

ウイングのコミュニケーションの障害の4分類を、筆者は表2のごとく再編し特徴をまとめてみた。

表2 アスペルガー障害児のコミュニケーションの障害

括弧内はウイングの分類によるもの

- 
- (1) 独特の発声方法（口調と声量調節の障害）
  - (2) 会話の相互性の欠如（話し言葉を使う際の障害、話し言葉を理解する際の障害）
  - (3) 非言語的なコミュニケーションの障害（非言語的なコミュニケーションの障害）
  - (4) 表現の難解さ、正確・確実さ、整合性、細部へのこだわり。  
（話し言葉を使う際の障害）
  - (5) 字義通り性：文字通りの言語理解を示し、言外の意味の理解は乏しい。  
（話し言葉を理解する際の障害）
- 

(1) は感覚過敏との関連、(2) (3) は基本的対人性との関係、(4) (5) は強迫症状との関連が考えられる。ここで感覚過敏について簡単に触れておく。通常発達の間は、目の前の人間が出す情報に自動的に焦点が合い、それ以外の情報は削除されてしまう。ところがアスペルガー障害児は自動的な情報の絞り込みや削除を行わない。我々が自動的に焦点を

合わせている情報は多くの情報の中に埋もれてしまい、逆に自動的に削除される情報の一部が異常に増幅されてしまう。それが外から観察すると感覚過敏ということになる。これらの自動的な情報の絞り込みは、おそらく乳幼児期には完成すると考えられる。乳児期には、周囲にいろいろな雑音があったとしても母親の声（と同じ音域の呼びかけ）に反応する。また保育園では、目の前の保育士の呼びかけを無意識のうちに聞き分けて、その内容を確認しようとする。アスペルガー障害児にはそれが困難である。例えば赤ちゃんの泣き声を嫌う障害児は、遠く離れたところから聞こえる子どもの泣き声に反応し、目の前の人間と会話の途中であるにも関わらず耳を塞いでしまう。あるいは、逆に掃除機の音に異常に興味を持っている子どもであれば、遠くで聞こえた掃除機の音に反応しそこに向かって走り出し、掃除機を確かめようとする。逆に大きな声で呼びかけてもまったく無視したように反応が見られないこともある。アスペルガー障害児は、聴覚過敏だけでなく、視覚、触覚、味覚、嗅覚すべてのものに自動的な絞り込みが出来ない感覚統合の問題がある。しかしその状況の中で生活する人間にとってはそれが当たり前であり、本人から訴えることはなく、周囲の人間が指摘しない限り気づかない。ウイングの記載した、口調と声量調節の障害は、聴覚過敏の影響と考えると理解しやすい。

話し言葉を使う際の障害、話し言葉を理解する際の障害を、より低年齢で観察されやすい基本的な対人性に由来するものと、学童期以降に出現する強迫関連症状に由来するものに分けた方がわかりやすいと考えて分類した。英語圏の言葉に比べて、日本語は曖昧な表現が多く、状況や人により話し方を変える必要があるが、その問題を検討する場合も強迫関連症状としてのコミュニケーション障害は有用な判断法と思われる。

また非言語的コミュニケーションの障害は、スペルベルとウィルソンの研究を基にして分析を加えた。

なお、高機能自閉症とアスペルガー障害の相違点は言語発達である。アスペルガー障害児は知能相当の言語獲得があるとされ、反響言語（オウム返し）、人称代名詞の逆転、極端な反復質問は通常は見られないとされている。しかしアスペルガー障害も基本的な対人性の障害を持つため、多くの人間が周囲に存在し緊張感のある場面では、反響言語や反復質問が出現することもある。コミュニケーションの障害が、対人的相互能力の程度の違いとして反映しているものとして理解することが可能かも知れない。知的に高いほど、また典型的なアスペルガー障害であるほど、(1)～(2)の症状は軽微であることが多いが、(3)～(5)の症状は根本的には変わりがなく、特に一般社会に参入し、対人交流が限界を超えると障害が目立つと思われる。

#### (1) 独特の発声方法

一本調子の声、芝居がかった声、独自のイントネーションを形成することもあり語尾を上

げる傾向がみられる。一般に感情や抑揚のこもらないような表現をすることが多い。例えば自身および両親が共に東京の出身であるにも関わらず、まったく別の地域のイントネーションで会話をすることがある。

不明な発語や奇声を発することや、動物の擬声語などで自分の感情を示すこともある。また、声の大きさや調子の調節の障害があり、状況に応じた声の調子や声量を調節できず、場に不適切な大声を発することもある。しかし、知的に高ければこれらの症状はあまり明らかではないこともある。

## (2) 会話の相互性の欠如

十分な語彙と理解力を持つにも関わらず、一方的な会話や、会話が不成立となることも認められる。投げかけられた質問をそのまま返すオウム返しや、文脈から離れて不適切に質問することが出現する。幼児期には他者からの言語の指示に従うことが困難である。学童期には咄嗟な質問に対応できず「今のは質問ですか？」などと確認することもある。奇妙な言葉やイントネーションが、特に質問に答えるときに目立つ。

この場合も知的に高いほど、これらの症状も目立たないが、会話が流暢であるにも関わらず、聞き手のニードに気づくことが出来ず、冗長に話し続けたり、聞き手に合わせて話題を変えたり話し方を変えたりすることが困難である。自身できちんと相手の話を聞くこともしばしば困難である。

## (3) 非言語的コミュニケーションの障害

顔を見ることは最も基本的な非言語的コミュニケーションの要素である。顔の視覚処理は物体の視覚処理と異なる特殊なものであるとされている。その理由は、物体の場合は各パーツに基づいた認識が有意であるのに対し、顔の視覚処理はパーツの集まりとしてではない全体的な処理が有意であること、物体と異なり、顔からは多様な情報が伝達されることが挙げられ、機能的脳画像研究から顔の処理に特殊化した視覚関連領域が存在することが報告されている。顔を見て視覚情報処理に関わるのは、脳の紡錘状回と上側頭溝の領域、表情についての情動認知および情動喚起に関わる部分は、扁桃体、大脳基底核、島が、表明の共鳴的応答は、下前頭回弁蓋部、それぞれが関わっているとされる。アスペルガー障害における非言語的コミュニケーションの障害においても、中核的対人認識の障害と関連して神経メカニズムの解明が期待される。

実際の症状としては、相手が示した非言語的な合図（ジェスチャー、表情など）を理解出来ない、アイコンタクトをとることも出来ない。またそれらを相手に返すことが出来ないなどとして現れる。例えば葬式場で大声を上げたり、悲しい表情をとらないなど（実際に悲しいとは思わなくても定型発達児はその場の雰囲気を読みとる）、場にそぐわない言動、表

情をとることがある。

#### (4) 表現の難解さ、正確・確実さ、整合性、細部へのこだわり

強迫的な思考、想像力と関係するが、一見正しい文法を使い語彙も豊富なように思えても、難解な言葉を用いること、正確・確実さ、整合性を求めること、細部へのこだわりがある一方で全体的な会話の流れには無頓着であることなどがある。そのため、会話を聞いてみると、独特のいいまわしや回りくどさが目立ち、話している本人自身も文章全体の理解に乏しく、聞き手も理解しにくいことが多い。

会話の相互性の欠如により、社会的なコミュニケーションのために言語を利用することがうまくできないことと相まって、集団の中では、その場にふさわしい会話を続けることが出来ない、一連の出来事を順序立てて話すことが出来ない、要約し手短かに話すことが出来ない、指示を順序立てて適切に相手にわかりやすく話すことが出来ない、想像的なストーリーを話したり書いたりすることが出来ない、などの特徴がみられる。

#### (5) 字義通り性

これも強迫的な思考、想像力と関係すると考えられるが、文字通りのみの言語理解を示し、言外の意味の理解は乏しい。比喩的な表現や冗談などが通じにくい。例えば「雨が降ろうが槍が降ろうが行かねばならない」という表現に対し、「槍が降ることがあるのか？ その時はどうやって備えなければならないのか」というような的はずれの会話になることもある。我々が日常生活で使用する「以心伝心」「暗黙の了解」などの実際の活用は当然のこと、単語の意味すらも理解できないと思われる。

社会生活では、ほのめかされた言外の意味を理解すること、冗談や言葉の遊びが理解できない、曖昧な言葉・ひとつで複数の意味をもつ言葉や表現・相反する表現（例えば「一石二鳥」と「二兎を追う者は一兎をも得ず」）、などの理解ができないなどの様子がみられる。

### 年代別検討

#### 1) 幼児期のコミュニケーションの問題

##### (1) 独特の発声方法

韻律の奇妙さ、独特の声の調子、一本調子の声で尻上がりになることが多い。会話の途中で奇声を発することがある。聴覚過敏、選択性の悪さに関連している。

##### (2) 会話の相互性の欠如

乳児期には呼名無視（自分の名前を呼ばれても反応しない）が見られる。発語は遅れることもあるが、正常のこともある。語彙は、要求語や挨拶語に加えて、数字や乗り物、熟語な

ど多少難解であっても、自分の興味の持った言葉に偏ることが多い。会話中、特に会話の開始時には、反響言語（オウム返し）がしばしば見られる。決まったパターンであれば会話が成立するが、初めての質問や、予期せぬ質問には、オウム返し、独り言、しばらく沈黙後に答えることも見られる。この間独り言を言うことも見られる。

同じ言葉（動詞や形容詞）でも、例えば「飲む」と尻上がりに言えば質問文で、尻上がりにしなければ肯定文であることは、通常発達児は1歳で（おそらく単語の意味を理解するのとはほぼ同時）に習得可能であるが、アスペルガーの子どもは習得が困難である。この場合、言葉の抑揚とともに質問者の表情を見て判断すると思われる。2語文の習得が可能となれば、表情を確認することがなくとも、例えば「朝ご飯食べた」と尻上がりに言えば質問文で、尻上がりにしなければ肯定文であることは、通常発達児は習得可能であるが、アスペルガーの子どもは習得が困難で、尻上がりの質問に対して、尻上がりの答え、すなわちオウム返しが見られることがある。「朝ご飯を食べましたか？」とわかりやすく質問すると答えられることもあるが、それでも反響言語が見られることも少なくない。「朝ご飯はパンですか、ご飯ですか」とより具体的な質問であれば答えられることが多い。このように単語の習得時期から、会話の困難に気づくことが早期発見につながるとと思われる。

また2語文や3語文も話すが、独特の声の調子や単調な話し方で感情がつかみにくいことも少なくない。コマーシャルで聞いた言葉をそのままのトーンで繰り返し言うこともある。さらに1対1の言語の指示に従うことが困難であり、また幼稚園や保育園など、小集団においても保育士等の言葉での指示に従えない。

ところで、単語を尻上がりに発音すると疑問文になるということの習得は、2歳ころではないかと思われる。隣の部屋からの問いかけなど、直接質問者の表情を見ることが出来ない場合、1歳台の子どもはまだ区別は困難であるが、2歳台の子どもは言葉の抑揚だけで区別が可能と考えられる。1歳では、尻上がりの質問に加えて、質問者がのぞき込む表情を見せていることに反応しているのかとも思われる。いずれにせよアスペルガー障害児は、この発達に遅れが見られる。最近の若い両親の中には、肯定文であっても尻上がりに発音する傾向が見られるが、乳幼児期の基本的な会話の習得には好ましくなく、特に広汎性発達障害を持つ子どもには不適な使用方法であろう。

### （3）非言語的なコミュニケーションの障害

非言語的な合図（ジェスチャー、表情など）を理解する能力もこの時期に急発達する。たとえば、親が名前を強い口調で呼び、顔をじっとにらみつけるのは、叱責の意味があり、定型発達児は、怖がったり、泣き出したりするが、アスペルガー障害児はそのとっさの理解は幼児期以降にならないとできない。すなわち非言語的な合図を理解する能力の発達が遅れ

る。しかし定型発達児童の非言語的コミュニケーションもこの年代では必ずしも十分に発達していない。

(4) 表現の難解さ、正確・確実さ、整合性、細部へのこだわり、および(5) 字義通り性についても、言語の獲得途上にあるこの時期は気づかれにくい。従って、アスペルガー障害児で(1)(2)の症状が軽ければ、この年代でのコミュニケーションの障害は気づかれにくい。

## 2) 学童期のコミュニケーションの障害

### (1) 独特の発声方法

奇声や擬声語は減少するが、独特のイントネーション、声の調子や声量の調節は場に不適切なことがある。聞き手に合わせて、声量や話し方を変えたりすることが出来ない。

### (2) 会話の相互性の欠如

クラス全体場で言語的指示に従うことが困難である。交互に会話することが出来ず、相手の話が終わるまで待てなかったり、相手の質問と関係ないことを会話することも見られる。自分から話しかけることが出来ない。一方的にそのとき自分の話したいことを話し出す。

疑問文、否定文、肯定文、受動態、能動態を適宜使い分けることが苦手である。難しい漢字の習得は得意であっても、文章の読解が苦手である。また、自分の思っていることをそのまま言葉に出すこともあり、相手に意ならずとも不快な思いをさせることもある。また、大勢の会話では誰が誰に話しているのかが分からず、話しに加わったり、自分への問いかけに返答することが困難である。

### (3) 非言語的なコミュニケーションの障害

人の目を見て話す、表情を理解することが困難である。アスペルガー障害児は、人の表情のパターンを認識し、そのパターンの時は、どうであるという1対1対応の認識を学習する。従って、同じ表情であっても人によって言外の意味が異なると困惑することも少なくない。次第に、認識のパターンを増やしていくが、あくまで1対1対応が原則で、初めてのパターン(他人の非言語的な反応)に出あうと困惑する。

1対1での対応であっても他人の動作、姿勢、表情、目と目の注視などを十分に読み取り、また自らが使うことが困難である。むろん集団の中では、動作、姿勢、表情、目と目の注視などを理解すること、自ら使用することが困難である。

相手の表情を読みとれない場合は、言語化して確認することもある。教師が怒りの表情を

見せたときに、「先生怒っているのですか？」と逐次確認し同級生の失笑を買うこともある。本人にとっては、表情の変化に気づいてもその理由が読みとれないのである。この年代の子ども達は、仮に表情が読みとれなくても、質問が場にそぐわないということに気づくであろうし、もし同じような発言をしたら、事実の確認ではなく、「そんなことで怒らないで欲しい」といった反語的な意味も言外に含んでいるとも言えよう。

(4) 表現の難解さ、正確・確実さ、整合性、細部へのこだわり。

特に知的に高いアスペルガー障害児は、難解な表現、漢字の使用を好む。大人びた言葉や四字熟語など難解な言葉を好む。しかしその理解は表面的である。形式的で、細かなことにこだわる。会話全体の流れや整合性よりも、部分的・細部の正確さ、確実さ、整合性にこだわる。これは文章で表現するときも同様である。

(5) 字義通り性（文字通りの言語理解を示し、言外の意味の理解は乏しい。）

物事を字義通りに理解し、冗談など言外の意味を理解することが困難である。言葉は達者で、難しい言葉を用いるが、表面的な使用が多く、比喻や冗談の理解が著しく困難である。表面的・暗示的な意味のとりちがえもある。文脈を理解することも苦手で、文章から作者の意図や人の気持ちを読み取ることが出来ない。

あるアスペルガー障害児の事例報告例であるが、「どんより」を使った作文で、「うどんよりラーメンが好き」という作文を書き、周囲が爆笑したにも関わらず、当人はなぜ笑われたか分からなかったという。おそらく、当人はどんよりという形容詞ではなく「ど」「ん」「よ」「り」という仮名の集合体として理解していたのではないだろうか。

### 3) 思春期のコミュニケーションの障害

(1) 独特の発声方法、(2) 会話の相互性の欠如、学校など対人交流が制限された範囲内であれば改善傾向にあるが、駅など不特定多数の集団の中で、不意に話しかけられたりすると、奇声をあげたり、語尾あげの話し方、反響言語などが出現することもある。これは大勢の中では、誰が誰に話しかけているか分からないためと考えられる。

(3) 非言語的コミュニケーションの障害

話者の発する言語が、事実と異なるなど不可解な時、あるいは相手の明らかな動作が明らかな意志・意図を持って自分に何らかを伝達しようとしていることは理解しているが、直感で理解することが出来ず、それまでに学習してきた多くのパターンから類似するものを推測し理解している。初めての場合は理解困難である。通常発達の子どもは、この年代では、言語化すると相手の気持ちを害することや、自分に不利益になることは、言語化しないか、アイコンタクトなどの方法で他者に伝達する方法を獲得している。しかしアスペルガー障害を

持った人間は、相手の気持ちを害するあるいは自分に不利益になるということが推測できず、しばしば思ったことをそのまま口に出してトラブルとなることがある。会話では話者や聞き手の立場を理解できないことから、話題を変えることが出来なかったり、その場にふさわしい会話を続けることが出来ない。

(4) 表現の難解さ、正確・確実さ、整合性、細部へのこだわり、は定型発達児と比較すると明らかになっていく傾向にある。難しい言葉を使うが、その意味はわかっていない。聞き手がどこまで状況を把握しているか推測することが困難であり、5 W 1 H (What, Who, When, Why, Where, How) を使用した説明が特に苦手である。聞き手のニーズに気づくことが出来ず、多弁であるが、その割には中身を理解していない。

通常この年代は、誤用が多いとしても敬語の使い方は獲得が可能である。ところがアスペルガー障害を持つものは、場にそぐわないほど丁寧な言葉があり聞き手に奇妙な印象を与える。人や状況により敬語の使い分けが出来ず、馬鹿丁寧な話し方や不躰な話し方になることも少なくない。アスペルガー障害を持つ人の敬語の使い方については、詳細に記載した文献は見あたらず、今後の検討を要するであろう。

#### (5) 字義通り性

アスペルガー障害を持つ人の言葉の解釈は原則的に1対1である。例えば友人と横断歩道を渡ろうとしている時に、その手前で青信号が点滅に変わったとする。この時同級生に「渡る?」と質問された場合、この年代であれば以下のパターンを考えるであろう。

- 1) 字義通りの質問、「急いで渡れば間に合うが、君は急いで渡りたいか?」
- 2) 話者の希望を伝え同じ行為を誘う場合; 自分は渡りたいが君と一緒に渡るか?
- 3) 否定の意味; 急いで渡らなくともいいと思うがどうか?
- 4) 命令の意味; 急いだら渡ることが出来る。急げ

アスペルガー障害を持つ児童は、字義通りに質問を受け取り、1) のパターンで認識する。そしてしばしば規則の過剰遵守的で、「信号が変わりそうであれば、渡らないのが決まりである。」と結論を出す。しかし、実際は2) の場合が多く、相手のそれまでの性格やその時の顔の表情によって3) もしくは4) の解釈を行う。つまり言語であれば1) の意味に限定されるが、コミュニケーションであれば1) ~ 4) すべての意味を含むのである。

思春期には、プライバシーや性的な興味の発達とも相まって、相手によって自分の意志を伝えるコミュニケーションの手段を変える。非言語的なコミュニケーションは、「暗黙の了解」「以心伝心」などと表されており、彼(彼女)らには理解が出来ない。

事例を2つ呈示する。いずれも中学生男児の事例である。A男は「試験が終了後1週間は職員室に入室禁止」という張り紙があったと繰り返し口にしていた。「どうしてか?」と尋ねると、理由がわかっていなかった。A男にとっては、1週間限定の規則が決まったので、

忘れないように努力していた（規則の過剰遵守）ののだが、張り紙にある言外（文字に記載されていない）の意味すなわち「試験終了後には職員室で教師が生徒の答案を採点中である」ことが理解出来ず、ひたすら規則を守ろうと努力していたと考えられる。B男は、常々家族に積極的にコミュニケーションをとるように言われていたらしい。初めて診察に訪れた小児精神神経科の外来で、最初に医師に話しかけてきた質問が「先生、好きな食べ物何ですか？」であった。おそらく、同級生や、弟の友人にも最初に同様の質問を行うことがコミュニケーションの始まりと考えているのだが、相手により質問のパターンを変えることでその場にふさわしい会話を続けることが出来ない。聞き手のニードで話を変えることが出来ないことを端的に示した事例であろう。

#### 4) 青年期・成人期のコミュニケーションの障害

青年期、成人期のコミュニケーションの問題としては、強迫関連症状に関連した症状と、意向－推測的コミュニケーションの理解が問題となる。アスペルガー障害を持つ人は多くのパターンを学習することにより理解している。

ハッペは3人のアスペルガー障害者の自叙伝や文章を分析し、その文章表現からコミュニケーションの問題を研究している。その中で、直喩、隠喩、irony（反語）の使用方法是興味深い。直喩は、「あなたはライオンのようだ」とか「父は総理大臣に似ている」などのように字義通りの解釈で、アスペルガー障害を持つ人も理解は難しくないであろう。もしこの例えがわかりづらくても「あなたはライオンのように攻撃的だ」「父の顔は総理大臣に似ている」という簡単な解説で理解可能であろう。隠喩は、言葉の上では、たとえの形式をとらない比喻で、「・・・の如し」「・・・のようだ」などの語を用いていない表現である。「百万ドルの夜景」「鉄の意志」などである。隠喩を理解するにはある程度相手の意図の理解が必要である。字義通りの解釈は成立しない。隠喩を字義通り受け取るのは困難であるから、表現に用いることも困難である。3人の文章に直喩に比べて隠喩を見いだすのは極めて困難であるとハッペは述べており、「私はドアである」のようにその部分だけでは解釈が困難であることを指摘している。彼らが述べている Irony は皮肉というよりは反語を指すと考えられる。反語とは、皮肉（実際とは反対のことを言って暗に本当の気持ちを表現した言い方）に加えて、話し手が自分の考えを強く言うために、主張と反対の内容を疑問の形で表現すること、反対の内容を述べることによって、逆に自分の考えを相手に強く認識させる表現法なども包括した意味である。例えば、寝坊した人に「今日は随分早いね」と言えば皮肉であるが、時間通りに来ない人間を待つときに「彼が遅刻するだろうか？」と言えば、「彼は遅刻するはずがない（途中で何かあったのではないか?）」という意味を持つのである。反語表現は直喩・隠喩以上に聞き手のことを推し量ることが要求され、ハッペは3人の自叙伝からは全く見られなかったと指摘している。日本語で使用される敬語は、時に隠喩や反語の意味

も含まれている。文法上は丁寧な表現であっても、意図することは逆な慇懃無礼な表現などは、彼らにとって最も理解しにくいコミュニケーション法であろう。

一般にアスペルガー障害を持つ人は、自分の知っている事柄については、相手がそのことを知らないかも知れないという配慮を持つことが出来ないため、話題の移り変わりが多く会話が突飛である。彼（彼女）らは、会話や文章の全体的統合が欠如しているが、普通の聞き手は保持していないような特殊な文脈を保持しており、それはしばしば本人がそれまでの学習によって得た多くのパターンと強迫的な規則遵守によるものであろう。強迫的と思われる言語使用の法則も、アスペルガー障害を持つ人たちには、結びつきのない無関係な情報を処理する能力が、通常の人間と異なり優れていることや、記憶構造が根本的に異なるため、相手からのメッセージをきちんと解釈したとしても、返答する会話はその人独特であり、相手の意図したものではないことがある。

#### おわりに

アスペルガー障害の人たちは、知的レベルはさしたる問題がないため、その障害に気づかれにくい。しかし広汎性発達障害の一型として考えると、対人性の障害、行動・興味の限局の中核的な特徴を持ち、独特なコミュニケーションの障害がある。今回、アスペルガー障害の人たちのコミュニケーションの障害を、中核症状の観点から検討した。コミュニケーションの障害は、定型発達児に遅れながらも克服していくことが可能であり、学校教育の現場では大きな問題がなく比較的適応も良好な場合もある。この要因としては、本人にも理由がわからないが他人とは認識が違うことを自覚し、積極的に心の理論の獲得に務め、学習によりコミュニケーションの方法を獲得していると思われる。この点からは、家族や学校で支援する体制が整っていれば、本人に診断名の告知が有効であろう。しかし、青年期以降、社会に参入すると、意向-推察測的コミュニケーションの問題が顕在化すると推測される。学習によって獲得出来るコミュニケーションの方法には限界が存在し、通常の世界生活ではそれを超える対人状況やコミュニケーション能力が求められるためと考えられる。アスペルガー障害の人たちの持つコミュニケーション能力の障害は、本人の努力のみで改善するものではない。その困難さを理解すること、社会参入後、対人状況やコミュニケーション状況に応じて支援することが求められよう。

#### 参考文献

書籍

- American Psychiatric Association 高橋三郎、大野裕、染谷俊幸訳『DSM-IV-TR 精神疾患の診断・統計マニュアル』（医学書院、2002年）  
 Attwood T: Asperger's syndrome: A Guide for Parents and Professionals. Jessica Kingsley Publishers, London 1998

- Cumine V, Leach J, Stevenson G 著、齊藤万比古監訳『教師のためのアスペルガー症候群ガイドブック』(中央法規出版、2005年)
- Frith U 編著、富田真紀訳『自閉症とアスペルガー症候群』(東京書籍、1996年)
- P・ハウリン著、久保紘章・谷口政隆・鈴木正子監訳『自閉症－成人期に向けての準備——能力の高い自閉症の人を中心に』(ぶどう社、2000年)
- Gillberg C. A guidance to Asperger's syndrome. Cambridge. Cambridge university press.2002
- Grandin Temple 著、カニングハム久子訳『我、自閉症に生まれて』(学研、1994年)
- Happe F, Autism, an Introduction to Psychological Theory. London: UCL Press.1994
- Klin A, Volkmar FR, Sparrow SS(eds): Asperger's Syndrome. Guildford Press, New York 2000
- Sperber D, Wilson D.Revalence: Communication and Cognition. Oxford, Blackwell, 1986
- Tantam D, A mind of man's own. London, National Autistic Society, 1987
- Wing L: The Autistic Spectrum- a Guidance for Parents and Professionals. Constable& Robinson, London. 1996
- 古荘純一 『新 小児精神神経学』(小児医事出版社、2006年)
- 古荘純一 『軽度発達障害と思春期 理解と対応のハンドブック』(明石書店、2006年)
- 村田豊久 『子どものこころの病理とその治療』(九州大学出版会、1999年)
- 榊原洋一 『アスペルガー症候群と学習障害』(講談社+α新書、2002年)
- 篠田達明監修『自閉症スペクトラムの医療・療育・教育』(金芳堂、2005年)
- 社団法人日本自閉症協会編『自閉症ガイドブックシリーズ1～3』(社団法人日本自閉症協会、2004年)
- 杉山登志郎 『アスペルガー症候群と高機能自閉症——青年期の社会性のために』(学研、2005年)
- 杉山登志郎、辻井正次編著『高機能広汎性発達障害』(ブレーン出版、1999年)
- 山登敬之著『子どもの精神科』(ちくま新書、2005年)

#### 雑誌等

- Asperger H; Die Austistschen Psychopathen im Kindesalter, Archiv fur Psychiatrie und Nervenkrankheiten (1944) English translation in Frith U (1994)
- Ehlers E., Gillberg C, Wing L : A screening questionnaire for Asperger syndrome and high-functioning autism spectrum disorder in school age children. J Aut Dev Disord 29 : 129-141, 1999
- Happe FG : The role of age and verbal ability in the theory of mind task performance of subject with autism. Child Development66 : 843-845, 1995
- Wing L. 'Asperger's Syndrome: a Clinical account'. Jounal of Psychological Medicine 11 115-129, 1981
- 臨床精神医学「アスペルガー症候群をめぐって—症例を中心に—」(アークメディア社、2005年9月号)
- こころのりんしょう a・la・carte「アスペルガー障害」(星和書店 25巻2号 2006年)
- そだちの科学第5号「アスペルガー症候群——軽度発達障害とそだち その1」(2005年10月号)
- そだちの科学第1号「自閉症とともに生きる」(2003年10月)